

講演題目：北米に於ける東洋学とその資料の動向

2005年6月15日(水) 豊橋図書館2階自習室

ミシガン大学アジア図書館館長代理 仁木 賢 司



仁木氏の紹介：

上智大学文学部哲学科卒業。1977年渡米。聖ジョーンズ大学でアジア学（中国近代史専攻）の修士取得。プラットインスティテュートで情報学修士取得。コロンビア大学アジア図書館等で勤務。聖ジョーンズ大学でアジアコレクションの長の後、現在ミシガン大学アジア図書館。

CJKとは：

本日当大学図書館に招かれました事を大変名誉に思っております。私はこの場を借りまして、北米に於ける東洋学の簡単な紹介とそれに付随します図書資料の収集、並びに現在及びこれからの東洋学のあり方とその資料の動向について、拙い経験から私見を述べさせていただきます。

近年北米も欧州も東洋、殊に極東＝北東アジアに関わる学問及び資料の事を大学図書館では、CJK Studiesと呼んでいます。この言葉は、1960年代に米国議会図書館で、Chinese, Japanese and Korean language materialsと言う形で、資料収集を一つの独立した単位として始めた時に、使われ始めたと言われております。今では世界中の図書館で普通に使われております。私は当初何故その様に違った歴史的背景、言語形態を持った国々を一つの単位とするのだろうと不思議に思っておりましたが、徐々にこれは漢字文化圏として考えるべきなんだ、と自分なりに納得致しました。即ちCJKの所有する知的世界は、他の高度な知的世界と肩を並べる程、或は凌駕さしてしまう世界なんだと言う事でしょう。

日本学：

北米でのアジア学、特に日本学は図書収集も含めて東海岸と西海岸に集中して発展しました。ここで忘れてならない事は、日本と敵対する戦争と言う政治的背景を持ちながらも、日本学、日本語を学ぼうとした学徒がい

たと言う事です。その歴史を外して今日の様な日本学の発展はあり得なかったと言えるでしょう。

東海岸で日本学の歴史があるのは、ハーバード大学とコロンビア大学でしょう。この2大学は全然別の方向で研究を進めて来た様に思えます。ハーバードは歴史学、政治学等を中心とし、コロンビアは圧倒的に文学を中心に思想、宗教等にその顕著な発展を示しています。因みに私のコロンビア大学在職中、ドナルド キーン教授、サイデンステッカー教授は共に日本文学の泰斗として教えておられました。彼らの図書館への尽力、研究振りには頭が下がりました。

西海岸ではUCバークレーを中心に日本学は発展しました。西海岸と東海岸の大きな違いは、東海岸が殆ど私立で、西海岸は殆ど公立ということ。この違いは学問の方向を決定する上に大変大きく作用している様に思えます。中西部に位置するミシガン大学は東西の発展と時を同じくしながら、全く独自の立場で日本学を発展させつつあり、日本映画、演劇、アニメ等の世界に非常に顕著な功績を作っています。

コレクション：

この各大学の研究に平行し夫々日本学の資料を収集していますが、UCバークレー、ミシガン、ハーバードそしてコロンビアが規模の大きさを競っているのが現実でしょう。参考の為にミシガン大学アジア図書館の日本語で書かれた研究書は、約29万冊に

なります。中国語は38万冊、韓国語は約2万冊弱となり、全体の重複率は1%以下でしょう。数字だけを追う場合、AAS /CEAL (Association for Asian Studies/Council on East Asian Libraries) の統計を参考にして頂ければ全て明らかになるでしょう。アメリカに於ける東洋学の資料に関する姿勢は、日本人が考える以上に長期に亘るタイムスパンを視野に据えて行われていると言っていいでしょう。元々欧米諸国に於ける東洋学なるものは、中国学であったし、CJKワールドは、絶対的に中国なのです。ですから東洋学の資料を収集している大学図書館は、圧倒的に中国の文献が日本語のそれを上回っております。私自身はCJKを一つの単位として、考えて今迄やって来ました。そういう意味からも、愛知大学の存在は昔から気になっておりました。ですから東亜同文書院関係のマイクロ資料を、オープンコンペで全部所有出来た事は、大きな喜びです。

コンソーシアム：

このコンソーシアムと呼ばれる地域共同利用の図書収集の概念は、年々物価高に喘ぐ昨今、高価な書籍を購入する事が各大学図書館では困難となり、互いに主題分野等を協議して責任分担を決め、その部分のみに集中して高価本を購入、ILLを通して共同利用しようと言う考えから出発しています。その他にも、通信媒体が発達して来た今は、あらゆる事を共同でやろうという動きに発展してきています。私の経験は、米国東部の日本関係資料を、コンソーシアムを形成してやろうと、1980年代半ばからハーバード、イエール、コロンビアそれにプリンストンの4大学が協議した時からのものです。高価本の他に、県史、市史、町史等地方史出版物、主に各地方自治体が出版している書籍を分担収集する事でした。これに依って、各大学は地方史に関しては自館の分担地域を徹底的に収集する事が義務づけられ、効果は出ていると思っています。全国的に広まりを見せ始めたのですが、メディア (Internet等) の発展に伴って基本的概念の変革に迫られているのが現状でしょう。

RLIN (Research Libraries Information Network) と OCLC (Online Computer Library Center)

この2大図書資料のデータベースは皆さん既に聞き及んでいらっしゃるかと推察しています。未だの方は、ウェブに頭文字を入力されますと、全て説明が出て参ります。

私が訓練を受けたのは、RLIN CJKの始まった直後1983年でした。世界で初めてのCJKの出来るキーボードを使って日本語の分類をし始めたときでした。当時全米で、スタンフォード、ミシガン、イエールそしてコロンビア大の4アジア図書館がテスト館として出発しました。それからしばらくして、OCLCがCJKの入力を始めました。

現在では、OCLCの発展がめざましく、全世界に向けて図書館情報網を敷き、メンバー館は2万以上となっています。このRLINとOCLCの大きな違いは、RLINが非営利団体であり、それに対してOCLCは営利事業である事です。営利を追求するOCLCはCJK分類のコンピューター化に遅れをとっていましたが、企業としての努力を重ね、次々と技術的にもサービスのにも進展を重ね、今の巨大な知的産業に成長しました。北米はOCLCを外しては図書館業務は語れないところまであります。LC (米国議会図書館) もこの2大ネットワークと連携を保ち、互いの蓄積された資料情報が何処からでも利用者に検索出来る様になりました。インターネットの発展は知的産業にこそ出来たのではないかと思う程です。

Librarianとして：

私が研究図書館 (research library) に長く席を置いている以上、RLINの検索方法が一番早く的確に資料にたどり着ける事を経験して、未だにWebサーチはRLINの検索方法でやっています。しかし、研究図書は高価であり、常に予算とのせめぎ合いに生きておりますが、こんな資料誰が必要としているかと考えたりする時が多々あります。そう言う時こそRLINの資料収集の原則概念に立ち返り、購入決定をするのが過去20年のプロフェッショナルとしての仕事でした。これから何年現職に留まれるか分かりませんが、米国に30年生きて図書館員として働いて、未だに満足な心持ちになれないのが現状です。愛知大学の様なユニークな大学と懇意になれました事を心より嬉しく感じております。本日このような機会に拙い話をする場を準備して下さいました成瀬さん始め諸関係者の方々に深く御礼申し上げます。

仁木。

※ミシガン大学に所蔵 (北米唯一として)
『東亜同文書院大旅行誌』
『中国調査旅行報告書』